

2018年10月28日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「わたしの服に触れたのはだれか」

聖書：マルコによる福音書5：21～43

私たちは忙しい社会の中に生きている。家庭、仕事、学校、人と人のお付き合いの中で生きている。この物語は忙しい社会の中で、イエスというお方がどのように私たちと向き合ってくださいのかを教えている。

物語は二つの出来事が交差している。まずはヤイロという人の娘が病気でイエスに癒して頂きたいと父親が懇願する。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください」と。イエスは承諾し娘のいる家に向うことになった。ところが、道の途中で別の出来事が起きてしまう。「長血を患う女」が現る。多くの医者にかかっても、全財産を使い果たしても治る気配もない。そんな女性がイエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。わらをもすがる思いで現れた一人の女性。当時の社会では、このような婦人病を患っている者は「汚れた者」とレッテルを張られ人々の前に出て来てはいけなかった。しかし、彼女はイエスが近くを通ることを聞いて勇気を出して、社会の常識を破り、イエスの前に出てきた。群衆の中にまぎれ込みそうとイエスの服に触れる。この物語はここから思わぬ展開を見せる。イエスは自分に触れた者を見つけようと辺りを見回す。ヤイロの娘のところに急ぐ状況にありながらもイエスは立ち止まるのだった。一人の苦しみ悩む女性に向き合うことをされるのだった。

この後、物語は急変する。ヤイロの娘はイエスが到着する前に死んでしまったのである。やはり遅かったのか、イエスもまた、この世の時間の中では、どうしようもないということか？ただ物語は死んだ娘のよみがえりで終えることになる。ここは単なる癒し物語のように見える。この世的には死んだ者がよみがえるということはない。「生き返ってほしい」と願うことはあっても、現実はそうはならない。では、この聖書は何を私たちに教えているのであろうか？

大事なことは、イエスというお方は一人の苦難の中にある者、悲しみの中にある者と向き合うお方であるということ。そのイエスに私たちも勇気をもって近づいてみないか。自分自身の悩みを、後回しにして子どもと向き合うことを優先し、家族のこと、仕事のことを優先して自分のことは後回しにしていらないだろうか？

イエス様に心から祈ってみませんか、あなたの声を、あなたの心の叫びを・・・神様は聞いてくださり、慰めを与え、勇気を与え、あなたの道を開いてくださり、共に歩んでくださる。聖書はそのことを私たちに教えている。(神谷)